

伊藤智ゆき（東京大学大学院人文社会系研究科）

本発表では、韓国朝鮮語方言の中でも比較的先行研究の少ない咸鏡道方言（朝鮮民主主義人民共和国）を対象に、予備的な音響音声学的分析の結果を報告する。分析対象は Robert S. Ramsey 名誉教授（メリーランド大学）の著書“Accent and Morphology in Korean Dialects”（1978年）の基礎となった録音テープである。元々1972-1974年に録音されたものであるが、Ramsey 教授のご厚意により、2017年にWAVファイルとしてデジタル化した。

咸鏡道方言は、中期朝鮮語（15-16世紀）に存在し、ソウル方言等では既に失われている弁別的ピッチアクセントを保存するなど、極めて保守的な方言である。実際、本研究の録音データにおいても、平音・激音間の明確なVOTの差、前舌母音 /e/・/ɛ/ の区別や前舌円唇母音 /ö, ü/ の存在等、現代ソウル方言に見られない保守的な特徴が複数確認された。一方、録音データの音質のため、H1-H2等分析が困難なものもあった。

約50年前の咸鏡道方言の音響音声学的特徴を調べることは、現在アクセスが困難である同方言について貴重な言語データを蓄積できるだけでなく、韓国朝鮮語全体における近年の言語変化をより良く理解するための一助となり得る点でも意義がある。このように、古い録音データの分析は、歴史言語学研究・方言研究・文献学研究を補助する代替アプローチとして有用であるものの、今後様々な品質の録音データを信頼できる言語資料として活用するためには、測定方法等、適切な方法論を模索していく必要がある。